



第4回：連合和歌山（日本労働組合総連合会和歌山県連合会）

地域貢献をめざすための新たな挑戦

一人びとの居場所づくり、子ども食堂支援に向けた構想

副事務局長（取材時）

佐々木 洋輔 氏

1. 「社会連帯活動」の位置づけと内容

—はじめに、「社会連帯活動」について、貴組織の運動方針ではどのように位置づけていらっしゃいますか。

【佐々木】連合和歌山では連合本部の運動方針にもとづき、推進分野1「社会連帯を通じた平和、人権、社会貢献への取り組みと次世代への継承」として社会連帯活動を位置づけています。活動を推進していくにあたり、連合和歌山の執行委員を中心に社会貢献活動推進委員会を設置し、社会活動の構想や課題などを議論しています。

2. 具体的な取り組み、および課題

—とくに力を入れている社会貢献活動の取り組みについてお聞かせください。

① フードドライブをつうじた子ども食堂への支援

【佐々木】2024年の第95回連合和歌山メーデーから、新しくフードドライブの取り組みを始めます。具体的には、組合員に向けて、賞味期

限が1ヶ月以上残っている食品、未使用の文房具、衣料、日用品などを持ってきてもらうよう呼びかける予定です。そして、集まった食品や日用品などは、NPO法人フードバンク和歌山をつうじて、支援を必要としている世帯や子ども食堂などに届けられます。このメーデーのフードドライブの活動について、和歌山市と隣の海南市で新聞の折り込みチラシを入れ（約5万世帯）、一般の方にも広く協力を呼びかけようと考えています。

和歌山県では「和歌山子ども食堂支援事業補助金」を助成するなど、子ども食堂の支援に県をあげて取り組んでいることもあり、連合和歌山も、子どもや地域の人びとのための居場所づくりに取り組む必要性や意義を感じていました。また、連合が取り組む活動は、労働条件や賃上げだけにとどまらず、地域への貢献にも関わりたいという思いから、身近な人にできる支援として子ども食堂やフードドライブを検討しました。

これに関して、2024年1月の地域活性化フォーラムでは、連合本部の方から連合東京の「子ども・若者支援プラットフォーム HOPE（ほっ

ペ)」の活動について講演をいただき、県外の先駆的な事例も学ぶことができました。連合東京では、子どもへの学習支援のノウハウをもつNPO法人などと連携し、ボランティアの派遣や経費の補助、子どもの居場所づくりなどの取り組みを実施されています。東京と和歌山では自治体の規模や地域の事情、支援が行き届く範囲も異なりますし、連合東京のモデルを和歌山でそのまま取り入れることは組織の資金や人材の面で難しいとは思いますが、継続的に子ども食堂へ支援をおこなう仕組みづくりが重要であると感じました。(編注：連合東京によるHOPEの取り組みは、弊誌2024年5/6月号で紹介している。あわせてご参照いただきたい)

一たしかに、地域によって取り巻く環境が異なるなかで、各地域の特色に合った支援の方法を見つけていく必要があると思います。“和歌山ならではの”の方法もおそらくあるのではないのでしょうか。

【佐々木】 連合和歌山でフードドライブの取り組みを始めるにあたって、集めた食品や物資をどこに・どのように届けるかを考える必要がありました。県内でフードドライブに取り組んでいる団体のうち、県内全域を支援の対象として広範囲に活動されている団体が「NPO法人フードバンク和歌山」のみであるということからこちらの団体と連携することとしました。このような組織と連携することで、県内の子ども食堂や福祉施設など、支援を必要としている組織に幅広く食品や物資を届けることができと思っています。

フードバンク和歌山の活動は、公益性の高い取り組みであるにもかかわらず、人件費や活動に必要な車のガソリン代などは、運営に関わる人たちの負担でまかなわれている一面があり、連合和歌山としても課題だと考えています。個

人の善意で事業が運営されている状況では、資金や人材が不足すると活動が継続できなくなってしまいます。地方連合会から補助金を出すという方法も考えられますが、組合費である以上、持続可能性という点で限界があります。そのため、連合和歌山ができることとして、公益性の高い事業を担う人や団体にたいしてきちんと支援をおこなうよう、行政に求めていくことが重要だと考えています。



副事務局長(取材時)
佐々木 洋輔氏

② 献血の推進

【佐々木】 ほかに特徴的な取り組みには、献血の推進が挙げられます。和歌山県赤十字血液センターと献血特別支援に関する連携協定を結んでおり、連合和歌山が組合員への啓発活動などで協力していくことを確認しています。

コロナ禍で献血の推進ができなかったことや、とくに冬は血液が不足するという事情から、直近では2～3月を連合和歌山の献血推進月間と位置づけ、産別組織へ協力を呼びかけました。その際、産別組織ごとにコードを振り、各組織で協力してくれた組合員数を把握できるようにしました。

一組織ごとに把握できると、取り組みの状況がわかりやすくなりますね。組合員の参加の状況はいかがでしょうか。

【佐々木】 推進月間に入って1ヶ月後(3/1時点)の協力件数は、想定していたよりかなり少ない状況でした。執行委員会でこれについて共有・検討したところ、2ヶ月という短いあいだに重点的に推進していくというよりも、一度献血し

たあととはしばらく献血ができない期間があることなどを考慮して、通年での取り組みが必要なのではないかという意見が出ました。そのため、推進月間が終わったあとも、1年をつうじてどれだけ献血に協力できたかを把握していこうと考えています。

献血においては、とくに若い世代からの協力が少ないことが課題です。一時期は献血に協力してくれた方へのノベルティ配布を検討したこともあります。実施にはいたりませんでした。何か恩恵を受けるために献血に協力するというのではなく、自分自身もいつ病気にかかったり事故に遭ったりするか分からないからこそ、人助けをできるときにするとといった意味合いが大きいと考えています。組合員の自由な意思を尊重しつつも、積極的な参加を呼びかける必要があると思っています。

③ 災害時のボランティア派遣・義援金の呼びかけ

【佐々木】災害ボランティア支援に関しても、連合和歌山で災害ボランティア支援チームを設置し、そのチームと和歌山県災害ボランティアセンターで2019年に協定を結んでいます。災害の際には、災害ボランティアセンターの要請に応じて、連合和歌山から最大300人（連合和歌山の組合員の1%に相当）規模のボランティアを派遣することや、平常時もボランティア活動にかかる研修、訓練等に参加・協力することなどを定めています。

協定を締結してはいるものの、災害時に実際にどのように活動すればよいかなどについて、組合員にあまり知られていないのではないかと懸念もありました。そこで、新たな取り組みとして、2024年4月以降に、組合員向けの研修会を実施することを検討しています。具体的には、ボランティアセンターが設立された経緯やボランティアとしての業務、参加すると

きの注意点などについて、災害ボランティアセンターから講師を招いて教えていただく予定です。

—先ほどの献血の話にも共通しますが、組合員の皆さんが社会貢献の取り組みの意義を理解して自発的に参画することが大切だと思います。被災した人のために自分の時間や労力を割いてボランティアをおこなうということも、自分もいつか災害に見舞われて助けてもらう側になるかもしれないからこそ支え合うということが根底にあるように感じました。

【佐々木】実際に、2023年6月の台風第2号による被害が発生した際には、県内の構成組織や組合員に災害義援金のカンパを呼びかけ、2023年9月までで合計181万5,360円の義援金が集まりました。集まった義援金は連合和歌山から和歌山県知事に直接手渡しし、感謝状も贈呈されました。

各産別に寄付を呼びかける際には、一人当たり「缶コーヒー1本分（100円程度）」といった具体的な目安を提示するように工夫しました。これは私の県職労での経験もふまえてですが、寄付する金額も完全に善意に任せるというより、少額でも出しやすい金額を明示することで、より集まりやすくなったのではないかと考えています。

④ 連合和歌山の森

【佐々木】連合和歌山では、「連合和歌山の森」を活用した森林保全活動にも取り組んでいます。こちらは、連合エコライフ21運動の一環で2006年から実施している取り組みです。日高川町寒川にある土地に、ウバメガシやケヤキなどの広葉樹を約2,000本植えており、定期的に組合員とともに下草刈りや歩道整備などの保

全活動をおこなってきましたが、20年近くが経ち、木々も成長したことで、その活動の役目を終えつつあります。活動は次の段階に入り、植林する新たな土地を探していく必要がありますが、土地の所有者や権利関係の確認などもあるため、連携している森林組合と調整をおこなっているところです。

3. 中長期の展望、構想

—とくにこれから注力されていく予定のフードドライブや子ども食堂の取り組みに関して、連合和歌山でどのような支援の方法を検討されているかなど、今後の展望やお考えをお聞かせください。

【佐々木】一時期は連合和歌山でも子ども食堂の運営を自分たちで担おうという構想がありましたが、人材やランニングコストの問題もあって難しいという結論にいたっています。ただ、子どもをはじめとする地域の人びとの居場所づくりについて、継続的に実施できることはないか、現在は模索しているところです。

先ほども述べましたが、連合和歌山からは、政策制度要求をつうじて活動を展開していくことができるのではないかと考えています。子ども食堂などを運営する団体へ視察に行っている議員もおられるようですが、運営にかかる資金の補助など、具体的な施策には至っていない現状がありますので、政策制度要求を通じて、支援の実現につなげることが大切だと思います。

—地域に密着した取り組みという点では、地域協議会（地協）も重要な役割を担っているのではないかと思います。社会連帯（貢献）活動を進めるうえで、それぞれの地域協議会にたいして働きかけなどはおこなわれているのでしょうか。

【佐々木】災害支援のカンパを募る際には、地協に呼びかけて街頭行動を実施しています。地域貢献としては、クリーンキャンペーンと称した街の清掃活動を各地協が自主的におこなっています。フードドライブの取り組みでも、地協をつうじて構成組織、組合員に寄付を呼びかけたり、メーカー当日もブースを設けて活動するように要請したりしています。

ただ、連合和歌山と地協で連携した地域貢献の取り組みについては、まだ具体的な構想は出てきていません。今後、たとえば、地協から子ども食堂へ人材面でも支援していくような仕組みができれば、連合和歌山全体として地域の活動に取り組むことができると思います。また、地域に根ざした活動を推進していくにあたり、実務を主として担える人材の確保も課題のひとつであると感じています。

連合全体としても、働く人のための運動だけでなく、社会全体のことを視野に入れた運動を進めていく必要があるなかで、連合和歌山の活動をさらに認知してもらうために、今まで以上に地域に根ざした取り組みに力を入れていくことができればと思っています。

組織概要

構成組織：25 産業別構成組織、1 地域ユニオン、4 地域協議会

組合員数：3 万人（2024 年 3 月時点）

結成：1989 年 12 月 19 日

URL <https://www.rengo-wakayama.jp/>

（インタビュー日：2024 年 3 月 21 日）

このインタビュー連載は、2024 年 5/6 月号よりスタートしました。地方連合会の連帯活動は、組織（地域）ごとに特色があり、多様な活動が展開されています。この活動に光をあて、地域の運動がどのように紡がれてきたのか、また、これからどのように展開していくのか、インタビューをつうじて（再）発見できればと考えています。